沖縄人民解放／返還協定調印阻止／

帝国主義ヌルジョア政府打倒、本土－沖縄労働者政府樹立

四・二八闘争死去学生大会へ結集された学友諸君！

昨日、栃木県小山において、二月三日より二期間に渡って徹底した実力闘争で斗った三里塚農民抑圧粉砕へ向け、第二次反撃、工事阻止を最後迄斗うべく、砦石輸送阻止斗争を粉砕脱しの内弾圧で斗い貫いた事を報告する。こうした三里塚、入管へとりわけ劇的闘争の斗いを、沖縄返還阻止斗争へ集約し、帝国主義ヌルジョア政府打倒、本土沖縄を貫く労働者政府を樹立しよう。

現在、ヌルジョアジーのアジア、九平洋の搾取をとった合理化運動の中で、戦後諸関係が対外、対内的に破綻された中で、沖縄返還がそうした事の最大のメルクマールとして貫徹されんとしている。そして、その事は、沖縄人民のさらなるヌルジョア政力の下への抑圧の強化としてあり、第三次琉球処分とも云へる形で、帝国主義戦争によって米民政府の統治下にあったにもかかわらず、「反革命」の一点で一掃した帝国主義ヌルジョアジーの国際連帯として「沖縄施政権」が日本政府に返還され、沖縄は、日韓合体反革命前進基地として「日米共同声明」の具体化が進んでいる。

沖縄において、この三年間米民政府の下で徹底した抑圧、差別が行われてきた。例えば、水道の制限は米軍が極っており、基地内で水が豊富に使われている時、沖縄の人民は給水制限を受けるという状態があり、一方全軍労の労働者にとって基地は、自分の生活の墓場として取り去る事の出来ないものとしてあった。しかし、「復帰協」運動は、そうした民族意識と用い共同体一丸」を基盤に進められ、眼界をもちつつ今日迄続けられて来た。そうして、「沖縄返還」がヌルジョアジーの日程に登った今、沖縄における労働者人民の運動が階級分化されんとしている。

ヌルジョアジーの「軍事基地による平和産業をもっての南方の拠点としての豊かな沖縄県」という幻想迷妄に包まれ、近代化日合理化政策の下へたたき込まれるのか、それとも自分の解放をブゾイエト運動を行う中から米民政府、琉球政府打倒を斗うのかが問われている。そこにおいて、「沖縄住立論」の運動は、一切有効性を持ち得ないだろう。「産良革新政府は何ら労働者的役割をなさず、二・四ストの圧・五ストの「処分攻撃」の様に分断と抑圧の先兵となっている」。沖縄人民の社会的、政治的隷属の強化は、只全土に渡って貫徹されんとする「高速度時代」における「新全国総合開発計画」として我々に迫っている。それは、「社会制ヌルジョア独裁の媒介の中でファシズムの現実性としてあるだろう。可能という中立性が在立基盤であったものが、強烈なレッドパージをもってファシズムへの変質が開始され、教育における多様制の教育という名をもっての個人の分断と能力の収奪が進んでいる。この明れにおいても、九学新聞編集部に対する処分攻撃、学生会館の永久閉封鎖、寮の強制的管理が近代化路線の改革路線の上に行われんとしており「帝国主義的教育の再編」の道を歩んでいる。帝国かエンゼーンが今こそ問われているのであり、七三年沖縄返還粉砕、労働者政府樹立へ向けて、地区労学共同斗争を、現実の我々の解決能力の開示としてブゾイエト運動を展開しようではないか。

14・28 全学ストライキ貫徹を克ち取らん。

4・27 中部地区（沖縄斗争勝利）
労働者、工部学生総決起集会

光文社労働組合、日本教育新聞労働組合
法政九五文連、日大五部、中大五部
主催　明大学苑会
66（7号館前）

明大反帝学評